

# デュラス夫人『エドゥワール』と スタンダール『アルマンズ』

—『アルマンズ』執筆時期に関する一考察—

田 戸 カンナ

## はじめに

スタンダールの第一小説『アルマンズ』(1827年刊)は近年、その成立過程が大きく見直しを迫られている。従来の定説では、『アルマンズ』はデュラス公爵夫人の『オリヴィエ』並びにアンリ・ド・ラトゥーシュの『オリヴィエ』の強い影響下に1826年に着想されかつ執筆されたと考えられてきた。従来の定説を詳述すると、デュラス夫人は1820年代はじめに『オリヴィエ』を書き、この小説は当時出版されることはなかったが友人知人を前に朗読され、性的不能というモチーフによって社交界で大いに話題になっていた。これに目を付けたラトゥーシュは同じく性的不能者を主人公にした『オリヴィエ』という同名のタイトルの小説を1825年末もしくは1826年はじめに出版する。ラトゥーシュは書籍の体裁に工夫を凝らし、自作の『オリヴィエ』をデュラス夫人作のもののように故意に見せかけていた。これを受けてスタンダールは早速1826年2月出版の『ニュー・マンズリー・マガジン』で、この出版された『オリヴィエ』がデュラス夫人の手になるものではなくラトゥーシュ執筆のものであることを十分に承知しながらも敢てこれをデュラス夫人執筆の作品とみなしつつ、この作品をイギリスの読者に紹介する(1826年1月18日付)。ラトゥーシュの『オリヴィエ』を読んでこの紹介記事を書いた頃、すなわち1826年1月にスタンダールは、後に『アルマンズ』と題される小説を書くことを考えついた。早速1826年1月30日あるいは31日に口述筆記が開始され、これはその八日から九日後の2月8日に下書きがほぼ終わった段階で中止される。「やむを得ず、つまり制作不能のためこの作品を止める」というメモがブッチ本に残されているが、執筆中断の理由が実際には何なのかははっきりしていない。その後キュリヤル伯爵夫人との破局を経ておよそ七箇月後の同年9月19日に『アルマンズ』は再開され、これは二十二日間を要し10月10日に終わる。10月15日頃から数箇月かけて修正が行われたものの、修正は非常に少なかった<sup>1</sup>。

ところが2000年に発表されたジェラルド・ラノーの説によれば、『アルマンズ』が着想された時期はラトゥーシュの『オリヴィエ』を読んだ後ではなく、1824年夏、おそくとも同年秋にさかのぼるといふ。というのも、1824年6月の時点でスタンダールは、デュラス夫人が後に『オリヴィエ』と題される作品を準備していることを既に知っていたからである。またラノーに従えば、『アルマンズ』の執筆が実際に開始されたのは1826年1月ではなく、一年早い1825年1月であって、一旦中断された後、最終的な執筆は1826年になされたという<sup>2</sup>。ラノーの説では従来の定説に対して、着想時期はおおよそ一年半、執筆開始時期はちょうど一年早かったことになる。

ところでデュラス夫人は『オリヴィエ』の他にも小説を数作執筆しているが、本稿ではとりわけ、サント＝ブーヴも絶賛し<sup>3</sup>、またデュラス夫人が残した数々の作品の中で「最も興味深い<sup>4</sup>」作とも

評される『エドゥワール』に注目し、この作品と『アルマンズ』の共通点を浮き彫りにしてみたい<sup>5</sup>。このことは『アルマンズ』の執筆開始時期を特定する一助となるであろう。

## I 『エドゥワール』の読者、評者スタンダール

まずは、スタンダールがデュラス夫人のサロンに出入りしていたのか否か、この問題を改めて確認することからはじめたい。デュラス夫人のサロンはドイツの探検家にして自然学者アレクサンダー・フォン・フンボルト、中国学者アベル・レミュザ、キュヴィエ、タレーランらの著名人に加えてさまざまな地位、主義の人々を客人として迎え入れており、王政復古期には最も華やかで評判のサロンの一つだった。たしかにフランソワ・ヴェルマルはスタンダールはこのサロンに足繁く通っていたと主張したし、デュラス夫人のサロンには訪問を許されていた自由主義の作家が数名いたのであるが、しかしながら、スタンダールはこのサロンの客ではなかったとする説が今日では定着している。アンリ・マルチノはその根拠として『エゴチスムの回想』第9章の一節に着目している。

[...] il ne m'en eût pas coûté davantage pour me faire supporter dans le salon de Mme de Talaru, ou de Mme de Duras [...].

Mais, en 1822, je n'avais pas compris toute l'importance de la réponse à cette question sur un homme qui imprime un livre qu'on lit :

*Quel homme est-ce ?*

J'ai été sauvé du mépris par cette réponse : « Il va beaucoup chez Mme de Tracy. » [...] Qu'eût-ce été si l'on avait répondu :

« Il va beaucoup chez Mme de Duras (Mlle de Kersaint). »<sup>6</sup>

[...] タラリュ夫人やデュラス夫人 [...] のサロンで受け入れられるにはそれほど大変ではなかったであろう。

だが1822年には、人々に読まれる書物を出版している人に関する次の質問、つまり「あちらはどのような方ですか」という質問に対する返答の重要性を私は全て理解しているわけではなかった。

「あの人はトラシー夫人邸によく行っていますよ」という返答によって、私は軽蔑を免れた。

[...] もし、「あの人はデュラス夫人（ケルサン嬢）邸によく行っていますよ」と人が答えていたならば、どうなっていたらうか。

上の原文では最初の文にある動詞の時制、すなわち条件法過去第二形及び最後の文にある条件節が注目されるのは言うまでもなく、引用の終わりの部分に対してマルチノは以下のような注釈を加えている。「スタンダールについての質問に対して『あの人はデュラス夫人邸によく行っていますよ』と人が付け加えなかったのは、スタンダールはデュラス夫人のところの客ではなかったのでそう答えることができなかったからである<sup>7</sup>。」リガ・リュシはヴェルマル、マルチノの相反する説を両者とも踏まえた上で、「スタンダールは才智に富んだ公爵夫人のところには一度も行ったことがない」と断言し、その理由をスタンダール自身の野心の欠如や自尊心に求めている<sup>8</sup>。

デュラス夫人は1820年代はじめに、出版する予定はないまま小説を書きはじめた。セネガルからフランスに連れて来られた黒人女性の一生を物語った『ウーリカ』はサロンで朗読され、1823年12月は

じめに対象を友人に限定して印刷される。この作品はそのおよそ三箇月後、1824年3月15日に一般読者に向けて出版され、大成功を収めた。舞台化、また数箇国語への翻訳も試みられ、さらにはウーリカ風の飾り襟や緑なし帽までもが製作されてその成功はモード界にも及んだ。果ては、デュラス夫人自身「ウーリカ」と呼ばれ、夫人の娘クララは「ブーリカ」、同じく夫人の娘フェリシーは「ブルジョニカ」とあだ名されるほどであった。スタンダールも1824年6月の『ニュー・マンズリー・マガジン』でこの小説の書評を試み、「数千部が非常に短い期間に売れた<sup>9</sup>」という具合に、その成功の様子をイギリスの読者に報告している。

流行を生んだこの著名な女流作家の第二発表作がほかならぬ『エドゥワール』であり、この小説は1822年3月21日以前に書きはじめられ、1822年5月14日には書き終わっていたと考えられる<sup>10</sup>。『エドゥワール』もまたサロンでの朗読を経て、1825年10月にまず友人のために50部印刷され、そのおよそ二箇月後の1825年12月にはラドヴォカ書店から一般読者に向けて出版されるに至り、その後は数箇国語に翻訳されてヨーロッパ規模の成功を博する<sup>11</sup>。

スタンダールは『エドゥワール』がラドヴォカ書店から刊行される以前、すなわちデュラス夫人が読者を友人に限って印刷した段階で既にこの小説を読んでいたと考えられる。というのもこの時点で彼は、デュラス夫人のサロンの客人ではなく、したがって『エドゥワール』の朗読を直接は聞いていないにもかかわらず、この作品を詳しく知らなければできないコメントを書き記しているからである。1825年12月の『ロンドン・マガジン』には1825年11月18日付のスタンダールの記事「グリムの孫息子による、パリからの手紙」が掲載され、ここでは「公爵夫人は友人にプレゼントするために、作品を豪華に50部しか印刷させていない」と明記されつつ、『エドゥワール』は新刊書籍として大まかなストーリーを伴って紹介され、続けて「この小説には真実味と自然さがある」点と同時に、ささいな感情がしばしば表現されていないことが残念である点までもが指摘されている<sup>12</sup>。

友人のために印刷された段階で既にスタンダールが『エドゥワール』を読んでいたことを裏付けるもう一つの書き物、それは1825年12月の『ニュー・マンズリー・マガジン』におけるスタンダール担当の記事である。この記事では『エドゥワール』に関する書評欄がわざわざ設けられ<sup>13</sup>、この書評はわずかにパラグラフから成るものではあるが、この小説の成功の様子やストーリーが紹介され、わけでも文体が批判されている点を見逃すわけにはいかない。この記事には執筆日は付けられていないけれども、雑誌の年月及び「友人に配付するために50部しか印刷されていない」という一節から、この記事が書かれたのは先の記事と同じく、『エドゥワール』がラドヴォカ書店から出版される以前のことであったと考えて間違いないだろう。

『エドゥワール』が一般読者に向けて出版されてからも、スタンダールはこの小説に繰り返し言及する。1826年2月の『ニュー・マンズリー・マガジン』掲載記事「パリの社交界の点描」は、先に触れたように、出版されたラトゥーシュ作の『オリヴィエ』をデュラス夫人の作品として紹介したものであるが、ここでも『エドゥワール』が博した成功が事実として述べられている<sup>14</sup>。この記事は1826年1月18日の日付がつけられているため、『エドゥワール』がラドヴォカ書店から出版された後に書かれたと考えられる。これから一年近く経た1826年11月18日付の記事「パリの社交界、政治そして文学の点描」(1827年1月『ニュー・マンズリー・マガジン』掲載)では、デュラス夫人が重い病にかかっていることが報告されるとともに、「愛の不可能」を描いた小説として『エドゥワール』に話が及ぶ<sup>15</sup>。この時病に冒されていたデュラス夫人は1828年1月にニースの地で他界する。これを受けてスタン

ダールは1828年5月の『ニュー・マンズリー・マガジン』内の記事「パリの社交界，政治そして文学の点描」（1828年4月20日付）において夫人の死を報告するとともに，かつてのパリの流行サロンを見事に描いた小説，また困難と不幸に対峙する愛をこの上なく感動的に描いた小説として『エドゥワール』に言及している<sup>16</sup>。

以上の考察から，スタンダールは『エドゥワール』が作者の友人に限って出版された段階で既にこの作品を読み，それ以降もこの作品に注目し続けていたことが明らかである。

## II 『エドゥワール』と『アルマンズ』の類似

### (1) 物語の結末

ところで，作品の内容に目を転じてみると，『アルマンズ』は『エドゥワール』と極めて似通った点，同じ点を数多く持ち合わせている<sup>17</sup>。まず，類似点として際立っているのは物語の結末である。

『アルマンズ』では物語の結末は最終章，すなわち第31章に置かれているのに対して，『エドゥワール』ではエドゥワールが綴った自らの人生の物語は「結び」の前で終わるものの，その続きとなる彼の人生が「序」及び「結び」で語られているため物語全体の結末は「序」と「結び」にまで及んでいる。こうした配置上の相違はあるにせよ，二作品における物語の結末の類似には目を引くものがある。

両作品とも結末においては男主人公と女主人公は別れを余儀なくされるのであるが，その際男主人公はいずれの作品においても女主人公に永遠の別れを予め告げることなく女主人公の許を立ち去ってゆく。その後に男主人公がとる行動も二作品間で似通っており，両者はともに乗船することを思い付く。エドゥワールはロリヤンまで行ってそこで大型船に乗り込み，オクターヴはマルセイユでやはり大型船に乗るという具合である。その大型船の行き先はいずれの場合も戦地である。エドゥワールが乗った船は戦地アメリカに向かって出港しボルチモアに到着したのに対して，オクターヴが乗り込んだ船は戦地ギリシアへと向かっていた。しかも，エドゥワールが赴いた当時アメリカで行われていたのは独立戦争であり，オクターヴが向かったギリシアで行われていたのもまた独立戦争であった。

たしかにここでは，エドゥワールはアメリカに上陸してフランス軍に志願兵として入隊し実際に戦うのに対して，オクターヴはギリシアの地を踏まずに終わるという相違はあるが，しかしオクターヴにも恋人と別れた後で独立戦争に加わって戦うという意図は全くないわけではなかった。というのも彼は，アルマンズに恋していることに気づき彼女の許を去ろうとした際，父親に向かって，「シチリアからギリシアに行くことになるでしょう。そうして戦いに加わるよう努めるつもりです<sup>18</sup>」と言っていたからである。また，エドゥワールは恋人と別れた後アメリカの地に渡ったのであるが，しかしながら彼がアメリカを目的地に選定したのには確たる理由があるわけではなかった。「私は修道院を離れると，少々知っているある青年に出会った。その青年はアメリカから着いたところで，アメリカについて話した。このアメリカという一語で決心がついていた。全ては私にとっては本当にどうでもよかった!<sup>19</sup>」オクターヴもアルマンズを愛していることに気付いて彼女の許を立ち去ろうとしていた際に，これと似た発想をしている。つまり，「旅の行き先はオクターヴにとってはどうでもよかった<sup>20</sup>」のである。

エドゥワールが乗った船は大西洋を，オクターヴが乗った船は地中海を横断するのであるが，船を取り巻く環境についても類似した要素が見られる。『エドゥワール』では船はアゾレス諸島の西を通過すること，一方『アルマンズ』では船舶はコルシカ島の横を通ることが語られる。アゾレス諸島，

コルシカ島はいずれも山々がある島であり、海と山の対比が同じく持ち込まれている。これに加えて『エドゥワール』では船と平行する「貿易風」,「星々」があらわれ、『アルマンズ』でも船を運んでいく風, 月が描写される。

船上でのそれぞれの男主人公に目をやると、両者とも死んだも同然の身となっている。エドゥワールは「私」に、「私は既に自分の目にはもう存在していないかのように」と言っており、他方オクターヴも結婚式が執り行われる前には既に「この世で死んだも同然であった」し、乗船後は死に至る病を装い、数日たつと人々の目には死が間近に迫っているように映る。オクターヴが船上で行った行為と言えば手紙の執筆が挙げられる。「オクターヴはアルマンズに手紙を書いた。[……] オクターヴは [……] 毎日、愛する人に手紙を書いては新たな喜びを味わっていた。」そして彼は執筆したこれらの手紙を乗組員たちに手渡す。恋人にあてて手紙をしたため、それを誰かに預けるという所作はまさにエドゥワールが乗船前に行っていたことでもある。「私は夫人に手紙を書き [……] たくなった。 [……] 私がヌヴェール夫人の老従僕に手紙を差し出すと、老従僕は涙にくれながらそれを受け取った。」

その後オクターヴは船上で自殺を遂げるのに対して、エドゥワールはアメリカで戦闘に加わり命を落とすのであるが、エドゥワールの死もまた自殺の様相を強く帯びている。彼は「命を捨て去ることを望んでいる人のように危険に身をさらしている<sup>21</sup>」たし、傷口からあふれる血を「私」が止めようとしてもそれを拒み、「死なせてください<sup>22</sup>」と口にしてしているからである。

以上に加えて、二作品では女主人公が物語の結末にとる行為にも共通点があることを指摘しないわけにはいかない。エドゥワールが旅立った時ヌヴェール夫人は友人のC...夫人と一緒に修道院に行っていた。アルマンズもオクターヴの死後ではあるが、マリヴェール夫人とともに修道院に赴いたのであった。

## (2) 地について

『エドゥワール』と『アルマンズ』では地に関しても似た設定がとられている。まず、二小説とも作品のはじめの方で、主人公の父親は息子をパリに置きたいと強く願っている。「この [ドロンヌ元帥の] 邸宅に、父は私を二十歳になったら連れて行くつもりだった<sup>23</sup>。」「父親のマリヴェール侯爵はひとり息子をパリに引き留めておきたいと思った<sup>24</sup>。」オクターヴもエドゥワールも父親のこの願いにしたがってパリに身を置くことになり、パリでの居住が恋愛を引き起こしていく。しかも、恋愛の舞台は両作品ともパリと田園に二分されている。田園は『エドゥワール』ではリムーザン地方の町エゼルシュから「数里のところ<sup>25</sup>」にあるファヴランジュ、『アルマンズ』ではパリの北方、四里のところ<sup>26</sup>に位置し、モンモランシーの谷を見下ろす村、アンディイである。

『アルマンズ』においてはボニヴェ夫人、マリヴェール一家、ドーマール夫人などパリの社交界人士たちが次々とアンディイに移り住み、さらにアンディイのサロンは「当時パリで最も著名で最も有力な人物を集めて<sup>26</sup>」おり、また距離が物理的に近いこともあって人物たちはパリとアンディイの間をしばしば往復する。これに対して『エドゥワール』では、パリから追放されたドロンヌ一家はパリとファヴランジュの間を往来することもなく、ファヴランジュにパリの社交界人士を迎え入れることもない。「というのも、ドロンヌ元帥は追放が続くかぎり、いかなる来客も迎え入れたくないと告げて<sup>27</sup>」いたからである。このように人士たちが見せるパリと田園間の行き来のありようは両作品で

異なるけれども、しかしながらファヴランジュの風景描写とアンディイのそれには同じ要素が多分に見出される。ファヴランジュには古い城、数々の丘があり、小さい丘は森になっていてそこに茂っているのは栗の木々である<sup>28</sup>。アンディイにも城はもちろんのこと、数々の丘、森になっている高台があり、その森にはやはり栗の木々が茂っている<sup>29</sup>。

また二小説には、田園を舞台にして互いに極めて似た要素並びに同一要素がふんだんに盛り込まれたシーンが存在する。それはエドゥワールとヌヴェール夫人がある晩、栗林で偶然出会うシーン<sup>30</sup>と、オクターヴとアルマンズが朝、城でやはり偶然出くわすシーン<sup>31</sup>である。エドゥワールが長い散歩から城に帰る際に栗林の外れに腰を下ろしていると、「私のほうへやって来るヌヴェール夫人が遠くから見えた。[……]ヌヴェール夫人は私のところへ来た。」ここに見られる、男主人公の目に遠くから女主人公が映り、女主人公が男主人公のところへやって来るという設定は問題の『アルマンズ』のシーンにもそっくりそのまま見出される。オクターヴが森で一晩明かした後城に帰ってくると、「最初に見かけた人はアルマンズだった<sup>32</sup>。[……]アルマンズはオクターヴを見かけるとすぐ、遠くから微笑んで駆け寄って来た。」しかも、男主人公のほうへまさにやって来る女主人公は、「彼女はこの森のニンフに似ていた」、「彼女は鳥の優雅さと軽やかさを帯びていた」というように、いずれの作品においても人間ではない何かの性質を帯びていることが語られてもいる。

すぐ上の二つの引用にはこれもまた類似性に富む以下の文がそれぞれ続いている。「私は夫人をうっとり見つめていた。これほど激しく夫人に引き付けられたと感じたことはまだ一度もなかった。」「オクターヴがアルマンズをこれほどかわいいと思ったことは一度もなかった。[……]オクターヴはアルマンズをむさぼるように眺めていた。」この時の女主人公の装いの類似にも着目すべきものがある。「ヌヴェール夫人は帽子を取っており、美しい髪がカールになって肩に垂れていた。軽い服がふわふわと浮いていた。」一方、アルマンズは麦わら帽子と「朝の簡素な服」を身にまとい、大きいカールの髪が頬にかかっていた。

偶然出会った恋人たちの会話はいずれの作品でも、「昼間はいったいどこにいらしたの?」「どうなさったの?」という具合に、まず女主人公の男主人公に対する問いが直接話法の形をもって語られている。これに引き続く会話ではエドゥワールとオクターヴはそれぞれの恋人に向かって全く同じことば——「私(僕)は出立します(する)」(je vais partir)——までも口にし、この主人公の意志はともに直接話法で語られてさえいる。この後エドゥワールは兵士になって戦死するなどとおそろしいことを言い放ち、これを聞いたヌヴェール夫人が「青白く、生気を失い、身じろぎ一つしな」になると、夫人の足下で許しを乞う。『アルマンズ』でもこれと似た展開が見られる。オクターヴはアルマンズに向かって自分は彼女を恋してはいないとはっきり言うと、アルマンズは気絶してしまい、彼は恋人の傍らにひざまずいて許しを乞う。「許しておくれ、おお、ぼくのいとしい天使よ。」この引用の終わりにある「天使」(ange)ということばは、エドゥワールがヌヴェール夫人の足下で許しを乞うた後でも、ヌヴェール夫人を指すのに使われている。

ところで、両作品とも男女の主人公の間には家柄の差が打ち立てられていた。エドゥワールが平民であるのに対してヌヴェール夫人が貴族であるのは言うまでもないが、同じく貴族ではあってもアルマンズとオクターヴでは家の格差が歴然としていた。マリヴェール侯爵家はパリでも屈指の由緒ある家であるのに対して、アルマンズはボニヴェ夫人の「お付き」のような立場にあった。どちらの作品においても、恋人同士の間には家柄の差が大きな障害として立ちはだかっていたわけであるが、この

ような中、恋の成就のために女主人公は両者ともフランスの地方に逃げ場を求めている。ヌヴェール夫人はエドゥワールに以下のように言っている。「私たちのささやかな避難所に、私たちの山の奥に引きこも[……]れば、少なくとも社交界で私たちが非難されているかどうかなんて分かるでしょうか<sup>33</sup>。」アルマンズは思う、「もしオクターヴが同じ身分の結婚相手の実家に期待できる財産と後盾よりも私のほうを採ってくれるなら、私たちは二人だけでひっそりと暮らしに行くこともできるでしょう。あの方がよく話してくれるドーフィネ地方にある、あの美しいマリヴェールの地で一年のうちの十箇月を過ごさないって法はないわ。世間は私たちのことなんかすぐに忘れてしまうでしょう<sup>34</sup>。」

主人公がフランスの地方のみならず、さらなる遠方、つまりアメリカ、無人島を恋の避難所として想定する点においても両作品は一致している。「全く孤立すれば、社交界のことも非難のことも忘れるだろう、必要とあらば夫人と一緒にアメリカに、さらには[……]あの無人島にまでも逃れようと私は思った<sup>35</sup>。」一方アルマンズも、「もしフランスを去らなければならないのなら、そしてたとえアメリカであっても、遠くで暮らさなければならないのなら、それなら二人で出発しましょう」と思っており、この直後「彼女の空想は[……]全き孤独の状態と無人島の仮定の中に迷いこんでいった<sup>36</sup>」のであった。

### Ⅲ 類似の利点

『エドゥワール』と『アルマンズ』の類似はこれまで見てきた数々の点にとどまることはなく、二作品にはこの他に、上流婦人並びにその上流婦人を取り巻く社交界の人々の似た振る舞いを描いた件がある。

ある日みんなはB...夫人の献身について長いことサロンで話していた。B...夫人は、天然痘にかかって生命が危ぶまれた親友のダンヴィル夫人とともに引きこもっていた。みんながこの行いをほめそやしていた<sup>37</sup>。

『エドゥワール』のこの一節は『アルマンズ』の次の一節を思い起こさせずにはおかない。

そうした人たちは、ボニヴェ夫人は親友のマリヴェール夫人と一緒にいるために自分の地所には行かずにアンディイで秋を過ごすという犠牲を払っているのだから、全て感じやすい心の人にとっては夫人の寂しさを分かち合いに行くのが果たさねばならない義務である、とはっきり言った<sup>38</sup>。

またエドゥワールは平民の出身であり、オクターヴは貴族であるという身分上の決定的な相違はあるにせよ、二人はともにそれぞれの家のひとり息子であるという設定も共通点として看過することはできない。

これまで検討してきた、主要作中人物や地、場面などの設定から描写の細部、果ては同一の文句に至るまでの多岐にわたる数々の共通点からすると、『エドゥワール』と『アルマンズ』が似た面を持ち合わせているのは単なる偶然からとは考え難い。既に確認したように、『エドゥワール』は1822年5月14日には執筆が終わっており、読者を友人に限定して出版されたのは1825年10月、ラドヴォカ書店から出版されたのは1825年12月のことであった。『アルマンズ』が執筆されたのは1825年から1826

年にかけて、ないしは1826年のことであるからには、デュラス夫人が『アルマンズ』の要素を自作に取り入れたのではなく、スタンダールが『エドゥワール』の要素を『アルマンズ』に持ち込んだと考えて間違いはない。『アルマンズ』はまさしく『エドゥワール』の影響下に執筆された作品なのである。

スタンダールが敢て『エドゥワール』の要素を『アルマンズ』に大いに取り込んだのにはそれなりの意図、利点があったのではなかろうか。サント＝ブーヴはスタンダールは貴族のサロンに行っていなかったために『アルマンズ』において貴族のサロンを真実味をもって描けなかったと主張し、この点を痛烈に非難したけれども<sup>39</sup>、スタンダールは貴族のサロンに足を運ぶことに小説家として決して無頓着ではなかった。それどころか彼は上流社会を描くことは、実際に上流社会に身を置いた経験がないと困難であるとさえ考えていた。先にも触れた、『アルマンズ』出版からわずか半年あまり後（1828年4月20日）に書かれた『ニュー・マンズリー・マガジン』の記事には、以下のように明記されている。

社交界を描こうとする作家にはまずもって社交界を見た経験、そして社交界で暮らした経験があることが絶対的に必要である<sup>40</sup>。

貴族社会に出入りしていない小説家が当代の貴族、貴族社会を描くことは危険である。なぜならば、もしある貴族がその小説を読んだならば、描かれている内容が貴族社会の現実とは異なることに即座に気付いてしまうであろうし、小説家自身は「上流社会に迎え入れられていない人とみなされる<sup>41</sup>」危険があるからである。まして、メリメにあてて書かれた書簡（1826年12月23日付）に「これ『アルマンズ』にはフランスのきれいな侯爵夫人を午前二時まで夜更かしさせるに足る熱があるでしょうか。それが問題です<sup>42</sup>」とあるように、スタンダールは『アルマンズ』が貴族の女性に読まれることを願っていたのであるからには、上流社会に通うことの重要性はいや増すばかりである。デュラス夫人について言えば、彼女が「自らが占める地位によって社会の最上階級に加わることができたために、夫人の小説はフランスの上流社会を忠実に描」きえているのである。ところが、上流社会に身を置くという「利点を持っている小説家はなんと少ないことか」。これもまたスタンダールが目のあたりにしていた現実であったし、実際当時、ブルジョワが貴族のサロンに出入りを許可されるのはそれほどたやすいことではなかった。

スタンダール自身も上流社会に身を置くという利点を十分に享受しえた小説家ではなかった。なるほど彼は王政復古期にはトラシー伯爵などのサロンに出入りはしていたのだが、御寝の間付き侍従としてルイ18世の信頼も厚かったデュラス公爵の妻やその他の有力貴族が開いていた当時の最も華やかなサロンの客ではなく、彼が王政復古期に訪問を許されていた貴族のサロンはごく限られていた。だが、『エドゥワール』の要素を『アルマンズ』に取り入れることで、スタンダールはブルジョワの小説家が当代の貴族社会を描く際に陥る危険をより一層回避することができるのではなかろうか。というのも、スタンダールは自分が十二分には知りえない貴族社会のありようを、『エドゥワール』と類似した点を導入することで自らの小説内で描き出すことができるからである。『エドゥワール』の要素を『アルマンズ』に取り込むことは、スタンダール自身の身分に端を発する限界を打ち破ることにつながると言える。

『エドゥワール』との類似について次に考えられる理由は、成功に対する期待である。先に触れた



とおり、『エドゥワール』は数箇国語に翻訳もされ当時大成功を収めた小説であった。『エドゥワール』には当然、まさに当時の読者が求めていたものがあつたはずであり、『エドゥワール』と似た小説を出版すれば読者の期待に大いに反することはなく、『エドゥワール』と同じように成功するかも知れない。もちろん、スタンダールはサロンで朗読されて話題となっていたデュラス夫人の『オリヴィエ』の影響下に『アルマンズ』を着想、執筆することによって『オリヴィエ』が引き起こしていたスキャンダルに乗じて自らも成功するのをねらつたと考えられるが<sup>43</sup>、それだけではなく、敢て『エドゥワール』と似た点を多く持つ作品を提示することによつても成功を目論んでいたのである。

## おわりに

ところで『アルマンズ』の執筆開始時期の決定との関連で、『アルマンズ』ブッチ本に記された1828年7月5日付の以下のスタンダールのメモ書きに着目したい。「九日間で書いたオリジナルを破る。四、五箇月の仕事の間オリジナルに行った変更の少なさに驚いている<sup>44</sup>。」ここにある「九日間で書いたオリジナル」とは、ラノーの説で言えば1825年1月30日あるいは31日から同年2月8日、従来の定説で言えば1826年1月30日あるいは31日から同年2月8日に書かれたマニユスクリのことである。また「四、五箇月の仕事」とは、ブッチ本の同じ用紙に「1826年<sup>45</sup>1月31日から2月8日まで『オリヴィエ』『アルマンズ』は当初『オリヴィエ』と題されていた」と取り組んだ。やむを得ず、つまり制作不能のためこの作品を止める。(…)1826年9月19日打開策として再開、10月10日終了。[…]不快でない文体で表現することがまだ残されている。[…]感情を示すことばと行為が頭に浮かんだらそれを付加することがまだ残されている」とも記されている(1826年10月18日付)からには、中断後1826年9月19日に再開された執筆、さらにその後の修正のことと考えるのが自然である。1828年7月5日付のメモを見る限り、1月末から2月8日にかけて執筆された「オリジナル」には1826年9月19日の執筆再開以降さほど大きな変更は加えられていないようである。

ここでラノー説を検討してみると、ラノー説の執筆開始月1825年1月の時点では、『エドゥワール』は既に関書き終わっていたのは明らかであり、朗読もされていたかも知れないが、まだ友人のための印刷はされてはいなかった。それゆゑ、デュラス夫人のサロンに出入りしていなかったスタンダールが1825年1月の時点で『エドゥワール』の細部までも詳しく知ることは不可能であつたと思われる。とすると、ラノー説ではスタンダールは1825年1月に『アルマンズ』の執筆を開始し、『エドゥワール』が1825年10月に友人に限定出版されたのを受けてこの小説を読み、それから1826年9月以降に『エドゥワール』の要素を『アルマンズ』に取り入れたことになる。そうすると、1825年1月から2月の執筆に1826年9月以降かなりの変更が加えられねばならないのは必須である。『エドゥワール』と似た場面、似た描写のみならず、身分違いの恋やひとり息子の男主人公という基本的設定までもが新たに導入される必要さえあつたかも知れない。すると、先の1828年7月5日付のブッチ本のメモ書きと矛盾をきたしはしないだろうか。従来の定説であれば、スタンダールは『エドゥワール』を読んだ後で『アルマンズ』を執筆しはじめたわけであり、そうであれば1826年1月から2月の執筆に同年9月以降大きく変更を加える必然性はなくなる。したがって、先の1828年7月5日付のブッチ本のメモとは何らの矛盾もきたさない。この観点からすると、『アルマンズ』の執筆開始時期に関しては、従来の定説が依然として説得力を持ち続けていると言わねばならないだろう。

註

- 1 従来の定説に関しては主に以下を参照した。Raymond Lebègue, *Avant-Propos à Armance*, *Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, 1967, t. V, pp. XXI-XXXI ; Henri Martineau, Introduction à *Armance*, Garnier, 1962, pp. II-V et XXV-XXVI ; Michel Crouzet, *Stendhal ou Monsieur Moi-même*, Grande Biographie Flammarion, 1990, pp. 428-433 ; Michel Crouzet, Historique du roman, *Le Rouge et le Noir*, *La Chartreuse de Parme*, *Lamiel*, *Armance*, Bouquins, 1980, pp. 1007-1008.
- 2 Gérald Rannaud, « Stendhal et la tentation de l'histoire », *Romantisme*, n° 107, 2000, pp. 20-21.
- 3 Sainte-Beuve, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, 1960, t. II, p. 1052.
- 4 Richard Bolster, « Stendhal, Mme de Duras et la tradition sentimentale », *Studi francesi*, n° 107, Maggio-Agosto 1992, p. 301. (筆者訳。以下同様。)
- 5 以下では『エドゥワール』と『赤と黒』の共通点が分析されている。Richard Bolster, art. cit., pp. 303-306 ; Gérald Rannaud, « De l'anecdote à la chronique », *Romantisme*, n° 111, 2001, pp. 45-48.
- 6 Stendhal, *Œuvres intimes*, éd. Victor Del Litto, Bibliothèque de la Pléiade, 1982, t. II, p. 510.
- 7 Henri Martineau, *Petit dictionnaire stendhalien*, Le Divan, 1948, p. 205.
- 8 Liga Lusic, « Stendhal et les salons aristocratiques sous la Restauration », *Stendhal Club*, n° 84, 15 juillet 1979, pp. 318-319. K. G. マクワターズやドゥニーズ・ヴィリウもまた、スタンダールがデュラス夫人のサロン客ではなかったと考えている。ヴィリウはその根拠の一つに、スタンダールが執筆した、デュラス夫人を批判する記事を挙げている。Stendhal, *Chroniques pour l'Angleterre*, éd. K. G. McWatters et Renée Dénier, Publications de l'Université des langues et lettres de Grenoble, 1980-1993, t. III, p. 207 ; Denise Virieux, Introduction à *Olivier*, José Corti, 1971, p. 46.
- 9 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. II, pp. 200-201. (ページは英訳、仏訳を含む。日本語訳は英文から訳出した。以下同様。)
- 10 『エドゥワール』の執筆時期については以下参照。Denise Virieux, Introduction à *Olivier*, p. 15.
- 11 『エドゥワール』の出版年月及び成功については以下参照。 *Ibid.*, pp. 35-36.
- 12 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. V, pp. 360-361.
- 13 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. III, pp. 204-205.
- 14 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. VI, pp. 82-83.
- 15 *Ibid.*, pp. 398-401.
- 16 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. VII, pp. 110-113.
- 17 『アルマンズ』はデュラス夫人の『オリヴィエ』とも共通点を数多くもっている。1971年にデュラス夫人の『オリヴィエ』をはじめて刊行したヴィリウは、主人公の病、医者存在、城での生活を通じて主人公同士が親密になること、告白の中断、主人公の逃亡、さらには「クリスタルの壁」« murs de cristal » (『オリヴィエ』書簡12) と「ダイヤモンドの壁」« mur de diamant » (『アルマンズ』第15章) といった類似する表現などおよそ十項目にわたる共通点を具体的に挙げている。Denise Virieux, Introduction à *Olivier*, pp. 47-48.
- 18 Stendhal, *Armance*, éd. Jean-Jacques Labia, GF, 1994, p. 171. (『アルマンズ』の日本語訳は小林正、富永明夫訳 (『スタンダールII』, 新潮世界文学6, 1969年) を参照させていただいた。)
- 19 Madame de Duras, *Édouard*, éd. Claudine Herrmann, Mercure de France, coll. Mille et une femmes, 1983, p. 127.
- 20 *Armance*, p. 170.
- 21 *Édouard*, p. 28.
- 22 *Ibid.*, p. 132.

- 23 *Ibid.*, p. 40.
- 24 *Armance*, p. 51.
- 25 *Édouard*, p. 81.
- 26 *Armance*, p. 211.
- 27 *Édouard*, p. 100.
- 28 *Ibid.*, pp. 81–82.
- 29 *Armance*, p. 157, 206.
- 30 *Édouard*, pp. 94–96.
- 31 *Armance*, pp. 168–169.
- 32 『アルマンズ』第二版のために修正を加えたブッチ本においては、「la première personne qu'il aperçut, ce fut Armance」（「最初に見かけた人はアルマンズだった」）という箇所は「à vingt pas de la porte, au détour d'une allée, il vit Armance」（「門から二十歩のところ、小道の曲り角でアルマンズが見えた」）と書き直されており（*Armance*, p. 279.）、「je vis de loin Mme de Nevers qui s'avancait vers moi」という『エドゥワール』の原文にさらに近くなっている。
- 33 *Édouard*, p. 97.
- 34 *Armance*, p. 139.
- 35 *Édouard*, p. 112.
- 36 *Armance*, p. 246.
- 37 *Édouard*, p. 52.
- 38 *Armance*, p. 207.
- 39 Sainte-Beuve, « M. de Stendhal, ses *Œuvres complètes* », *Stendhal*, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, coll. Mémoire de la critique, 1996, pp. 315–316.
- 40 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. VII, pp. 110–111.
- 41 *Chroniques pour l'Angleterre*, t. VI, pp. 84–85. (『ニュー・マンズリー・マガジン』掲載記事, 1826年1月18日付。)
- 42 Stendhal, *Correspondance générale*, éd. Victor Del Litto, Honoré Champion, 1999, t. III, p. 599. (傍点は原文イタリック, 以下同様。)
- 43 以下参照。C. J. Greshoff, « Tenir la marquise éveillée ou *Armance* », *Stendhal Club*, n°115, 15 avril 1987, p. 256.
- 44 Victor Del Litto, « Stendhal lecteur d'*Armance* (Exemplaire interfolié Bucci) », *Stendhal Club*, n° 71, 15 avril 1976, p. 198.
- 45 この「1826年」は、ラノーの説では「1825年」の書き誤りとみなされるはずである。

(たど かなな 総合教育センター)